

【特集】

知りたい！
もっと読んでみたい！



同志社の教員や卒業生が執筆した「新島八重」をもっと知るための書籍17冊を紹介します。

新島八重関連書籍紹介



同志社エンタープライズ 730円(税込)

新島八重子回想録

ながさわかみお 永澤嘉巳男編集

本書は1973年に永澤嘉巳男氏の編集で出版された『新島八重子回想録』の復刻である。刊行から既に39年を経て在庫もなかったが、この度、大河ドラマの主人公新島八重の肉声が収められた資料的価値を重視して復刻された。そもそも永澤氏が同志社大学の学生時代に10回ほど八重の元を訪れ、インタビューした記事が元の原稿である。記事は当時発行されていた『同志社新聞』(同志社学生新聞会発行)に連載されていた。この掲載記事を永澤氏自らが加筆訂正して出版したものが本書の原本である。

本書を一読すれば、その内容が夫・新島襄とのエピソードで埋め尽くされていることは容易に知りえよう。八重は襄との出会いや夫婦生活について多くを雄弁に物語る。元がインタビュー記事ということもあり、八重が語るように綴られる本文は大変読みやすく読み手にやさしい。また、八重の言葉は読み手に違和感を与えない。この違和感を与えないことが本書の醍醐味の一つである。明治時代の、いまだに女性の社会的立場が高くない時代に、八重が襄と交わす会話は、まるで現代の夫婦間でも交わされそうな内容である。つまり、八重が精神的に襄と等しく、もしくは襄がアメリカの夫婦間に見られるように、家庭を支えるパートナーとして接していたことをうかがわせるエピソードも貴重であるが、二人の關係に注目しながら是非本書を一読いただきたい。

小枝弘和(同志社大学同志社資料センター)



先着せり合わせ：
課報大学女子
問合含む
品非売

同志社の母 新島八重

同志社女子大学新島八重研究会編

同志社は、大河ドラマ「八重の桜」に全面的に協力することを表明している。それと並行して、同志社内では新島八重の見直し作業も精力的に行われている。女子大学でも昨年新島八重研究会を発足させ、あらためて女子大学の創設期において八重の果たした役割の重要性を再確認しつつある。これによって悪妻とも評された従来の八重のイメージとは異なる、プラスの八重像が浮上してきた。そして在学生、卒業生、教職員に八重に対する理解を深めてもらうために、コンパクトな八重本を発行することになった。本書は、新

島八重研究会の成果の一部である。執筆者は主に研究会のメンバーだが、メンバー以外の特別寄稿も含まれている。また、清水久美子先生には、八重の衣装再現という難題をお引き受けいただき、深く感謝している。

編集方針として、全体にわかりやすい文章にすることを心掛けた。八重の生涯をきちんと紹介することはもちろんだが、執筆者各自の専門性を活かしたテーマを設定することで、女子大学ならではのユニークなコラムを並べることができた。そのためわずか120頁の小さな本だが、他の八重本とは一味違う真摯な内容となっている。是非一読して、八重の人間的なあたたかさを感じとっていただきたい。いずれ八重ブームは去るだろうが、女子大学において八重は決して忘れ去られることなく、長く学生のお手本となる女性として、今後の女子教育に活用していきたい。

吉海直人(同志社大学表文化学部教授)



思文閣出版 1,995円(税込)

日本の元氣印・新島八重

新島襄を語る・別巻(二)

もとやすひろ 本井康博(大学神学部教授)著

大河ドラマ「八重の桜」の放映は、同志社関係者に大きな影響をもたらした。新島襄研究の第一人者・本井康博教授も例外ではない。われらが本井先生は、今や新島八重研究の第一人者として超多忙な日々を送られている。

『新島襄を語る』シリーズは、本井先生が全10巻(現在9巻まで刊行済)の予定で、ライフワーク的に出版されてきたものである。各地で行った講演等をまとめたものであるため、時に碎けた今風の表現も交えた話言葉である、わかりやすく楽しい内容

思いがけなくも嬉しい大河の

影響は、このシリーズにもあった。八重について記した別巻があったに企画され、このたび第一巻(会津編)が発刊となった。八重については、すでにシリーズ第七巻「ハンサムに生きる」で「家庭人としての新島先生」を語る上で「新島夫人」として描かれた。今回の『日本の元氣印・新島八重』は、そこには描ききれなかった八重の姿が、特に会津とのかかわりにおいて詳しく記されている。最初の夫・川崎尚之助のこと、八重にも劣らず魅力的な会津の女性たちのごなどなど、これを読めば大河が一層面白くなることは間違いない。

ともすると大河によって、あるいは大河に便乗し、真実とは異なる八重の姿が伝えられかねないことへの研究者としての懸念と真実を伝えなければならぬという使命感から、別巻は誕生したという。八重研究が一気に深まったのは実にありがたく、興味深い。別巻二(京都編)は、八重の信仰についても記されるという。こちらにも大いに期待したい。

山下智子(新島学園短期大学准教授)



思文閣出版
1,995円(税込)

八重さん、お乗りになりますか

—新島襄を語る・別巻(二)—

本井康博(大学神学部教授) 著

本書は、私にとって5冊目の「八重本」です。類書がすでに数十冊も噴出、というご時世に、「屋上屋を架す」愚は、ご法度です。あえて出すからには、それなりの工夫と覚悟が要ります。

前著の『日本の元氣印・新島八重』は、八重の会津時代でした。思いっきり大河ドラマ寄りの構成です。八重の京都時代を扱った本書は、逆に「八重の桜」とは一線を画しました。衝撃的な新発見と秘話の解明に努めましたので、ちよつと「危ない話」が入っています。

たとえば、八重の「不倫風評」。

著者より



NHK出版
1,260円(税込)

明治(美人)論

—メディアは女性をどう変えたか—

佐伯順子(大学社会学部教授) 著

明治女性について研究し始めたのは大学院時代。同志社で働くことも、新島八重が大河ドラマの主人公となることも、予想だにしていなかった。今回、明治メディアが伝える女性像について単著にまとめることができ、たのも「見えざる御手の導き」であろうか。

拙著では、明治の新聞、雑誌記事、特に、写真入りの記事にみられる女学生、芸者、女優、作家、セレブといった多彩な女性たちを紹介。近代のメディアが登場した幕末・明治期は、女性にとつても新しい時代の始まり。男女平等論、女子教育の推

著者より



歴史春秋社
1,260円(税込)

時代を駆ける新島八重

野口信一

小枝弘和(大学社会資料調査員) 共著

本書は、大河ドラマ「八重の桜」の放映が決定する前から、会津と京都で新島八重関係の資料を最も近くで見て研究を進めてきた野口・小枝両氏がタッグを組んで手がけた待望の一冊である。

八重の生涯は3期から捉える。と理解しやすいといわれるが、本書もそれに準じる形で3部構成となっている。PART1では会津における幼少時代から戊辰戦争での奮闘まで、PART2では京都における新島襄夫人としての八重、PART3では襄亡き後の篤志看護婦としての活動や茶道に興ずる姿がそれぞれ時代背景を織り交ぜながら分かりや

日本で初の公表です。八重の信仰面を執拗に分析したのも、そうです。「八重はほんとに信徒?」の答えを探りました。いずれも、これまで誰も書かなかった、いや、書けなかった秘話でした。奇しきことに、発行が本書と同日になった山下智子牧師の『新島八重ものがたり』(日本キリスト教団出版局、2012年)と共に、神学部教員ならではの宗教色濃厚な「八重本」になればいいな、と思いました。八重の家族関係にも切り込みました。天折したと信じられてきた姉は、どうしてどうして、京都で長寿でした。名前や子孫も突き止めました。さらに、八重は裏に死なれた後、養子を3人もとり、孫のひとりに同志社を継がせる夢さえ、抱いていました。山形(沢村久)との人事交流も盛んでした。

八重の研究は、ようやく始まったばかりです。どうやら私の「八重本」も、5冊では終わるようありません。

すく記されている。逆境の中にあつても道を切り拓いていく八重の力強さは現代を生きる私たちに多くの示唆を与えてくれる。本書の最大の特徴は、100点を超える写真、文書資料、絵画資料等が全ページにわたって掲載されていることである。その数は現在書店に数多く並ぶ八重関連の書籍の中でも随一と言え、写真集のように眺めるだけでも十分に楽しむことができる。また昨今の研究によって明らかになった新事実やこれまであまり注目されることがなかった八重を取り巻く人々についても数多く取り上げられ、コラムも充実している。まさに、これから八重を知りたいと思う人から専門的な知識を深めたいと考える人まで幅広く活用できる内容となっている。

古山智行(福島県立博物館 福島主任学芸員)



芸艸堂
2,100円(税込)

八重・襄・覚馬 三人の出会い

吉田曠二

坂井 誠(大学人文科学研究所) 共著

昨年12月に標記書籍が出版されました。執筆は吉田曠二氏との共著というかたちです。

4章 新島襄 「エピソード」

坂井 誠 「第1章 三人のめぐりあい」「第2章 山本寛馬」「第3章 新島八重」

の分担執筆としました。八重関係の出版物をすべて読んでわけはありませんが、一つの流れとして、フィクション

進がメディアでも盛んにとりあげられるなか、明治の女学生の勉強風景や、作家や女優として社会に進出する女性たちの姿が、現代の私たちの目にも、写真入りでリアルに伝わってくる。

明治の新聞記事は、虚実ないまぜの内容ではあるが、鋭い社会批評やユーモアに富み、現代の記事よりもむしろ面白い。激動の明治を生き抜く女性たちの「勇前ぶり、新しい時代を切り拓こうとする意欲は、21世紀の私たちが見失いがちな、ひたむきな向上心やハングリ―精神に立ち溢れ、それはまさに、新島八重の「ハンサムな精神」に通じるもの。男女を問わず、現代を生きる私たちにも大いに刺激になる生き様である。

八重と襄についても、同時代のメディアにおける女性像との比較で論じ、広く時代の流れのなかで、2人の人生の特徴をとらえてみた。大河ドラマ鑑賞のお供としても(p.1)、参考になればと願う。

著者より

として「八重」が語られているように思われます。

我々が留意した点は、ノン・フィクションとして「八重を描こうとしたところ」にあります。そのためには「八重のみをクロス・アップさせることより、兄の「覚馬」や夫の「襄」とのかかわりあいの中で把握する必要があること、さらに時代状況を念頭において描くこと、また3人の事績を通してその意識が如何なるものであったのかを描くことに力点をおいたつもりです。

なお、巻頭の写真には初公開のものもあり、「エピソード」部分の八重や覚馬の徳富蘇峰宛の書簡も全く知られていなかったもので、新資料として公開されたことの意味は大きいと考えられます。とくに、八重の蘇峰宛書簡では新島の死後の心境や状況が語られている点は興味を惹かれるところです。

坂井 誠



新島八重
ハンサムな女傑の生涯
淡交社
1,260円(税込)

新島八重
—ハンサムな女傑の生涯—
同社同窓会編

本書の特徴は、一人の著者が八重の生涯を時系列的に語るという手法ではなく、それぞれの専門家の立場から、八重の思考・行動を彼女の生きた時代に即して考察し、深く広く紹介していることである。すなわち、「個性」「夫婦生活」「故郷・会津での日々」「教育者としての姿」「キリスト教信仰」「看護の精神」「茶の湯」という七つの切り口から八重の実像に迫ることにより、単に新島八重の生涯の読み物として終わるのではなく、幕末から明治・大正・昭和にわたって、めまぐるしく変化する時代環境の中を、様々な苦難を乗り越えて

自らの人生を生き抜いた女性の姿と、その意味を浮き彫りにすることを旨とした書である。それぞれの時代の八重の生き方の根底にあったのは、進取の気性と矜持の精神であり、具体的には、常に前向きで一生涯懸命、周囲を気にすることなく、逆境に屈することなく、会津女性の誇りを堅持して生きた八重の姿である。しかし、そのような生き方を見せた彼女の内面は、鶴ヶ城での徹底的な敗北により打ちのめされた自己を見つめ直し、キリスト教の理念と、真正のクリスチャン新島襄との恵まれた結婚生活の中で徐々に立て直そうと格闘していたのである。また夫の死後は、さらに新たな自己の確立を求め、禅と茶道の境地に心の安定を求めて生きる道を見出そうと模索した。

近年、外国のキリスト教会で座禅が積極的に取り入れられている風景を見聞きするにつけ、八重の先進性に驚かされる。執筆者代表
坂本清音(女子大学名誉教授)



新島八重
福本武久
筑摩書房
1,680円(税込)

小説・新島八重
勇婦、最後の祈り

福本武久(1965年)著

数えて八八歳まで生きた新島八重はいくつもの顔をもっています。「さむらいレディー」といふべき会津若松時代は、洋式銃砲という近代兵器に眼をむけていたという一点で先駆的でした。新島襄とともに暮らしたクリスチャン「レディー」の時代は英語を学び、聖書を学び、文字通り近代女性として颯爽と駆けぬけました。

先に刊行した『小説・新島八重 会津おんな戦記』『小説・新島八重 新島襄とその妻』は、そういう時代を描いており、それぞれ自立した作品世界をなし

ています。本書『小説・新島八重 勇婦、最後の祈り』は、それら連作のフィナーレをなす作品です。

新島襄亡き後の八重は社会活動に身を投じ、たとえば日清・日露戦争では篤志看護婦として従軍、看護は女性にふさわしい職業であり、女といえども国家に役立つことをみずから実証して見せました。晩年は当時としては珍しい女流茶道家として、女性の茶道人口拡大に力をつくしながら、終生にわたり新島襄と会津戦争の語り部をつとめています。八重はこのように、つねに時代の最先端を歩んでいきます。

女が人間としてみとめられなかった時代にあつて、良人を亡くし、独り身となつた八重が、どのような思いで社会に関わり、時代をこじあげようとしていたのか。孤独な闘いに挑んだ八重、作品世界に登場する彼女の半生がそれにこたえてくれています。著者より



新島襄と八重
原書房
1,680円(税込)

新島襄と八重
—同志の絆—

福本武久(1965年)著

八重を中心にして良人の新島襄、兄の山本覚馬の人生を、ざつと眺めてみると、この三人は夫婦であり、兄妹であり、義兄弟であるとともに、同志の絆で強くしつかり結ばれていたことがよくわかります。本書はそんな切り口から、三人についての評伝ふうの稿や講演録をおさめて編んだものです。

密航者・新島襄は薩長中心の明治新政府をまるで信用していませんでした。新政府から仕官をせよといわれてもなびかず、アメリカ伝道協会から帰化した

いかといわれても、きつぱりと撥ねつけ、誰にもしぼられない日本人として帰国、キリスト教主義の学校をつくろうと胸に期していました。

八重と兄覚馬は戊辰戦争で薩長に敗れ、新政府からしめだされた人間でした。だから、同じ幕府側にいた人間でありながら、戊辰戦争を体験していないために、まったく挫折感もなく、薩長の新政府と対等に向き合える新島襄が好もしくみえたにちがいありません。ならば三人が結びつくのはごく自然のなりゆきで、いわば反中央、自主、自立をキーワードにして同志となつたのです。

八重、襄、覚馬がどのように関わり、どのように歩んだのか。そういう観点から作成した詳しい年譜を巻末にかかげました。著者より



八重と新島襄
毎日新聞社
1,575円(税込)

八重と新島襄

福本武久(1965年)著

新島八重の一生は、幕末から明治、大正、昭和にと及ぶ。その人生を貫く一本の芯は何だったのか、いかなる状況にありうとも安易な妥協を拒み、「市民」としての自立を崩さなかつたその姿勢は、今の私たちに何を教えているのか、そのことをさぐってみようと思つた書である。

八重の名は地元会津でもそれほど知られていない。会津戊辰戦争で官軍と戦つた女性は少なくないが、その中にあつて八重は砲術師範の娘として男勝りの戦いを行っている。鶴ヶ城籠城

戦1カ月、会津軍は敗者となるが、城明け渡しするとき、官軍兵士が駆け込んでくるのを見て、八重は、「残念……奸賊共」とつぶやいた。八重にとつて、その後の明治政府はまさに奸賊の集団だったことになる。

いつか主君のためにも朝敵の汚名を晴らしたい、明治政府とは一線を画す、というのが八重の生きる姿勢だった。京都にあつて兄覚馬の縁で新島襄と結婚するが、八重は、襄の大学を持ちたいとの情熱、信仰を深める日々の祈り、何より知性を土台にした生活を尊ぶ、その生き方に強い信頼を寄せた。

ふたりの意識と生活は明治初期にはあまりにも進歩的すぎていたが、やがて日本にも「市民社会」が誕生することを予見していたかのようでもあつた。私たちは本学校祖のその精神に学ぶべきだ、それも本書に取り組んだ所以である。著者より



フォア文庫 岩崎書店
630円(税込)

新島八重
—会津と京都に咲いた
大輪の花—

国松俊英(1996年)
著

小・中学生向けに新島八重さんの生涯を書かせてもらいました。八重さんが新島襄先生の妻で、同志社創立の頃の先生を支えたことは知っていました。けれどどんな女性だったのか、どんな人生を送ったのかについては詳しく知りませんでした。

調べていくにつれ、少女時代のことや鶴ヶ城での籠城戦のことなどがわかってきました。自らの手で人生を切り開き、力強く生きていく姿に驚くとともに、深い感銘を受けました。

資料調査には、今出川の大学

図書館にとってもお世話になりました。図書館では、これまでに発行された「新島研究」や「同志社時報」、そして新島襄先生についての本をしっかりと読むことができました。

幕末から明治初めの日本は激動の時代です。大きく揺れ動き複雑な歴史の背景を、正確にわかりやすく書くことに努めました。そして八重さんの少女時代が生きてきたと浮かび上がるように書きたいと思いました。本を手にした子どもたちが引き込まれ、どんどん読んでいくような本にしたいと努力しました。

八重さんの生きた日々はもちろん、同志社創立の頃の新島先生や山本覚馬らの苦闘する姿を書くことができて、ほんとうによかったと思っています。

本を読んで下さった人たちに少しでも勇気と励ましを与えることができれば、こんなうれしいことはありません。

著者より



講談社
1,680円(税込)

ジヨウの夢
—新島襄と徳富蘇峰、
そして八重—

増田晶文(1983年)
著

ひたむきな男たちが、ひたすら追い求めた夢とは……。小説『ジヨウの夢』の主人公は、同志社を創立した新島襄と、明治の大ジャーナリスト徳富蘇峰の2人です。

日本の青春期ともいえる明治時代、新島はわが国で初の私立総合大学創立の「夢」を抱いて疾駆しました。「良心を手腕に運用する人物」を育てる必要を声高に語り、物質文明に毒された日本に警鐘を鳴らしました。

そんな彼の傍らには、徳富蘇峰がいます。弱冠13歳、生意気盛りの徳富

少年は、33歳だった同志社英学校の新島襄に、ひと目で惚れ込むのです。以来、蘇峰の新島に対する尊敬と仰慕の念は終生変わりませんでした。

そして彼は、師のため、同志社大学設立運動に尽力します。『ジヨウの夢』のチャームポイントとして、2013年の大河ドラマの主人公、新島の妻の八重も重要な役回りを演じます。さらに、襄のよき理解者となった大隈重信はもちろん、私立大学設立のうえでライバルだった福澤諭吉、明治の政界を闊歩した井上馨、陸奥宗光、勝海舟など歴史上の人物もふんだんに登場します。

夢、師弟愛、夫婦の絆……新島襄の生涯には、真摯に生きた人間だからこそ紡いだ情念が折り重なっています。カネの多寡で人生の勝ち組と負け組と決めつけ、教育の場においても混迷から抜け出せない今日だからこそ、『ジヨウの夢』を手に取り、「夢」に思いをめぐらせていただきたいと願っております。

著者より



新人物往来社
1,680円(税込)

**新島八重—新島襄・八重
夫妻の時代一粒の麦**

みさきりゆうま(1993年)
著

本書は、新島先生ご夫妻が、だんじりの町・岸和田で行った布教の記録を冒頭に紹介しています。地方の具体的事例を通じて時代背景を身近に感じて理解していただき、これを踏まえて新島先生と八重夫人が生きた幕末という時代と、勝海舟はじめ坂本龍馬や土方歳三らの数々の英雄との接点を紹介しています。小学生にも読んでいただける分かりやすい短い話を48話作成し、ルポ形式で提供しました。校友の皆様の会話の話題になるようなネタ本として、また大河ドラマをより身近に感じられるようなテキストブックとして、各校友が知っておくべき同志社の記録をまとめた参考書として

利用できるように作成できたのではないかと考えております

①「八重の校」を通じて、校友が同志社を学ぶ意義を高め、同志社人として強い意識を持つて社会に貢献する。

②「八重の校」を通じて、校友が建学精神や新島教育を改めて認識する。

③「八重の校」を通じて、校友が歴史を学ぶ意義を高め、同志社人として強い意識を持つて社会に貢献する。

この特別な年を前に、永く埃をかぶり人々の記憶から忘れ去られようとしていた新島先生ご夫妻の伝道記録と偶然にも出会いました。色々と葛藤もございましたが、私自身がこの責任と向かい合えればと考え刊本させていただきます。一介の同窓の想いが、どうか皆様に伝わればと祈っております。著者より



祥伝社黄金文庫
680円(税込)

サムライガール
—新島八重

**維新を駆け抜けた
「烈婦」の生涯**

高野澄(1962年)
著

会津を離れて京都へゆくと決断したのが八重の生涯のヤマ場だと設定して『サムライガール 新島八重』の構想を立てたが、思い通りには書けなかった。

京都へゆくか、ゆかないか——提案したのは兄の覚馬のほずだ。八重としては天から降って湧いた提案だが、最初の衝撃が消えたあと、兄の提案には逆らいたい誘惑があるのを知り、そこから煩悶の日々がはじまる。

母や兄嫁や姪を連れての京都ゆきを斗南藩(青森県)が許

してくれるのか？

——兄は青森県の士族にはならないつもりらしいが、そんなことをして迫害をうけないのだろうか？

——何よりも、自分自身の気持ちがあるのか、知らねばならない。わたしはこのまま会津に留まりたいのか、京都へゆきたいのか？

悩み、考え、八重は決断した、京都へ行って自分の人生を変えるのだと。

決断を下したのは廃藩置県が断行された明治4年だが、会津落城から明治4年までの八重の暮らしの詳細を知る史料を見つけられなかったから、悩み、考え、京都へゆくと決断するまでの八重の生涯のヤマ場を描けなかった。

それが口惜しい。もういちどチャンスがあればと渴望している。

著者より



講談社

1,890円(税込)

めぐり逢い 新島八重回想記

鳥越 碧 とりごゑ みどり
1967年
女子大学文学部卒業(著)

新島襄の妻、八重は、会津藩の砲術指南役の家に生まれたお転婆な少女でした。女性としての稽古事には見向きもせず、武術や砲術の稽古に夢中になり、その腕は藩中に聞こえるほどに上達します。やがて、京都守護職の松平容保が新政府軍から追われ、賊軍の汚名を着せられて会津戦争となり、八重たち女も籠城して藩士とともに戦います。八重は、男装して銃を取って戦いますが、1か月の籠城後、鶴ヶ城は落城し、一家は京にいる兄の覚馬を頼って上洛します。この京の地で、八重はアメリカ

カから帰国したばかりで、キリスト教主義の学校設立の夢に燃える襄にめぐり逢い、結婚します。決して諦めず苦難に立ち向かう襄に、八重はぐいぐい惹かれていきます。

拙著「めぐり逢い」では、男まさりで、会津戦争の時には女であるよりも男として銃を取って戦ったことを誇りとした八重が、いつしか、愛する夫に、女として愛されたいと望むように変わっていきます。が、夫婦の糸は、キリスト教、会津への想い、襄の理想の女性像などがからみ合ってもつれていきます。この世に与えられた生を熱く生き抜くバイタリテイあふれる襄の、あまたの試練を一つひとつ乗り越えていく姿を史実に添って追いつ、八重が、どのように夫婦のもつれた糸を解して己の再生を描いたしていくか、その心の裡を描いてみました。ともあれ、拙著「めぐり逢い」で、新島襄と八重の奇跡のめぐり逢いを愉しんでいただけでは幸いです。

著者より



日本キリスト教団出版局

1,575円(税込)

新島八重ものがたり

山下智子 やましたともこ
新島学園短期大学准教授(著)

「神のよき友となれ」、これは満83歳の八重が友人の賛美歌の見開きに残した言葉です。賛美歌というのがポイントです。八重の葬儀でも歌われた愛唱賛美歌の歌詞は「いつくしみふかき主の手にひかれて このよのたびじを あゆむぞうれしきいつくしみふかき 主の友となりて 御手にひかれつつ あめにのぼりゆかん」(傍線山下)であり、これを踏まえていると思われるからです。

だが八重のよき友となり八重を支えてくれたのでしょうか。この賛美歌「いつくしみふかき」には信仰者として最晩年を迎えた八重の深い共感があり、だからこそ署名をする際に、その様な「いつくしみふかき神さまに自らも積極的に応えて生きる幸い」を思い「神のよき友となれ」と記したのではないのでしょうか。

「新島八重ものがたり」は、これまであまり語られてこなかった襄の妻となつて以降の八重、とくにクリスチャンとしての八重の心のあり方については、新しい資料をもちいて詳しく記しました。

戊辰戦争で見られた八重の八重らしさは、襄とキリスト教との出会いを経て、より八重らしく花開いていったように感じられます。たとえ周囲に誤解されようともこのびやかに自分らしく生きた八重の生涯は、わたしたちがそれぞれに「わたしらしく生きる」励ましに満ちています。

著者より